

葉っぱの力(2)

群馬 直美

初めて絵を描いたのは、いつだったろう？

初めて踊ったのは、いつだったろう？

初めて描いた絵

初めて絵を描いたのは、いつだったろう？

幼稚園の教室。

先生が読んでくれた『ちび黒さんぽ』。

トラがバターになっちゃう話。

「今聞いたお話を絵に描いてみよう」

真っ白な画用紙とクレヨンがでてきた。

何を描いていいのかわからなかった。

わたしの画用紙はずっと真っ白のまま。

隣の男の子は、一心不乱に描いている。

黄色のクレヨン、茶色のクレヨン、

緑色のクレヨン、茶色のクレヨン、

緑色のクレヨン……

そっかあ、こうに描けばいいのさあ。

まねして描いた。したら、先生にほめられた。

みんなの羨望のまなざし。

絵を描けばみんなの輪の中に入っていける！

人気者になれる！

絵を描くのがスキになった。

絵を描くって

祖父母が家にやって来ると、

ちいさな絵描き魂に火が点く。

紙とクレヨンを持って、祖父の前に陣取る。

「なになに。絵を描いてくれるんかい？」

祖父の顔が、嬉しそうにほころぶ。

床にはいつくばって、祖父の顔を見上げる。

見上げては、紙を見る。

見上げては、紙を見る。

ついに、完成！

祖父母、両親、みんな拍手喝采で大喜び。

絵を描くって、スゴイことだ。

こんなに多くの人たちが喜んでくれる。

みんながこんなに幸せになれる！

ますます絵を描くのが、スキになった。

白い紙にタチムカウ大人

いとこの家に預けられていた。

毎週一回、お習字の先生がやって来た。

正座して、白い紙を前に置き、黒い硯で墨をする。

一生懸命、墨をする。

黙々と墨をする。

こんなに何も言わない大人を初めて見た。

こんなに黙々と、

なんだかわからないことに打ち込む大人を

初めて見た。

一挙手一動に心が研ぎ澄まされる。

わたしも正座をし、ピンと背筋を伸ばして、

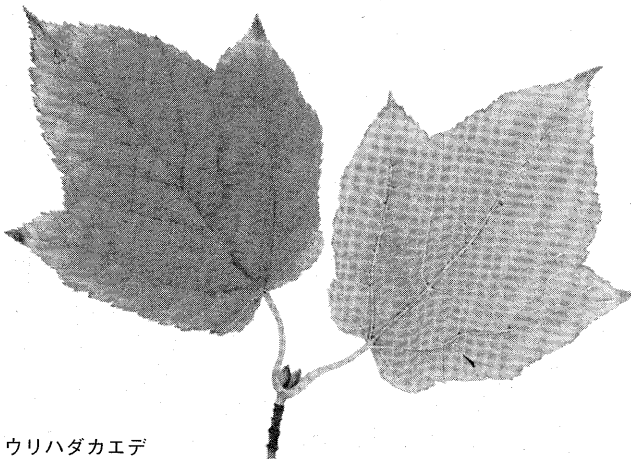
じつと見る。

先生は筆を執り、硯に浸して巧みに穂先を整える。

刀のような穂先で、先生は白い紙にタチムカウ。

一と書いた。

こんなに時間をかけて一を書く大人を初めて見た。



ウリハダカエデ

「そんなにお習字がスキだったら、やってみるかいい？」

飽きもせず、毎週お習字を見ていたわたしに、

ある日、先生が言った。

じつは、やってみたくてウズウズしていた。

わたしは、メキメキ上達した。

五級、四級、三級……とんとん拍子に進級して、

あつどいという間に一級になった……ここで足踏み。

「先生の家の子は、初段になったのにねえ」

書道協会の会報を見ながら、両親がつぶやく。

わたしは普通の家の子だからダメなんだ、

いくらガンバッテモ……

両親のつぶやきの裏側に、

世の中の仕組みを感じとる。

白い紙が真っ黒になった。

真っ黒な紙にタチムカイタクハナイ。

真っ白な紙にタチムカウ大人が、

わたしはスキだった。

初めて踊った

幼稚園の学芸会でやった『うらしま太郎』

わたしは、タイやヒラメの舞い踊りのタイの役。

紙に描いたタイのかぶり物。タイ色の衣装。

タイやヒラメに囲まれて、乙姫様が踊る。

乙姫様は、一番背の高い女の子。

学芸会も近づいたある日、乙姫様が風邪でダウン。

困った先生は、二番目に背の高かったわたしに、

「踊ってごらん。いつも見ていたから覚えてるわよ

ね？」

わたしは何も覚えていなかった。

いつも、ぼーっとしていた。

みんなが円陣を組んで座る。
わたしはひとり立ち上がり、円の中に入る。
何をしたのか憶えていない。

だけど、十把一からげ、その他大勢じゃない自分を感じ
てドキドキした。



ハウチワカエデ

みんなに見られていると、
普段とは違う自分に出遭える！
これが本当の自分！の様な気がした。

初めての即興

これまた、幼稚園のとき。

『舌切り雀』の意地悪ばあさんをやった。

心の汚い悪者の役なんかいやだった。

ゴザを敷きつめた講堂で、

先生が意地悪ばあさんの服に着替えさせてくれた。

悪者っぽい、腹黒っぽい色の着物。

帯もきちんと締め、手ぬぐいで頬被り。

着物の襟首には、

縫いつけられたねずみ色の手ぬぐい。

リアルなりトル意地悪ばあさんの一丁上がり。

きれいな色の服がよかつたのになあ……

大きなたらいと洗濯板。

ごしごし洗濯する意地悪ばあさん。

場内はどよめいた。

「まあ、カワイイ！」

思いがけない歓声に、嬉しくなった。

雀役の女の子が出てきて、たらいの周りを回る。

銀紙で出来た大きな舌切バサミを持って追いかける。

雀役の女の子が転んでしまった。

どうしよう……

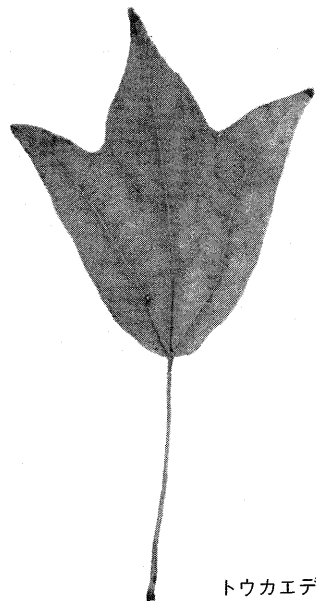
とっさにわたしは天を仰ぎ、

その場で走る振りをした。舌切バサミを振りかざす。

これが生まれて始めてやったアドリブ（即興）。

舞台って面白い！

人に見られていると、



トウカエデ

ほーっとしている自分じゃなくなる。

こんな幼少期の体験や記憶が、今のわたしをかたちづ
くっているようです。

わたしに絵や踊りの才能があったかといえば、全くな
かったと思います。ただ、わたしが絵を描くと、周りの
人たちがとても敏感に反応してくれた。喜んでくれた。

満面の笑みで讃えてくれた。それが嬉しくてわたしは描
いた。



つい先日、障害者のイベントで踊りました。

見ているみんなのお陰で、踊ることができました。わたくしが踊ったというより、その場に居合わせた、ひとりひとりの人たちが踊った、という感覚でした。

パフォーマンスを終えると、ひとりの少年が舞台袖にいました。半ズボンのポケットからゴソゴソと、宝物のようなひと粒のガムを差し出し、

「よくあんなに踊れるね！」

少年は顔を紅潮させて今わたしが踊ったように、自分でもくねくねからだを動かして言うのです。（あら、わたしよりうまい！）そして、舞台袖に落ちていたちいさなピンク色のスパンコールを拾い上げ、わたしの手のひらにそつとのおせてくれました。

オリンピックの金メダルをもらったような気がしました。

イベント会場内に入ると、知的障碍（あるいは自閉症？）の若者たちの何人かと目と目が合いました。非常に哲学的で知的なまなざしの深さです。そのまなざしの奥の奥に、今行った即興ダンスをしつかりと讃えてくれている微かな表情を、わたしは読み取りました。少なくとも、この人たちとはダンスでコミュニケーションできた！これは、どんな賛辞よりも心に残る出来事でした。

ありふれた一枚の葉っぱは、みんなの祝福を浴びて、スクスク育つのです。

（葉画家）

☆イラストは三点とも筆者による。紙／テンペラ

群馬直美『木の葉の美術館』世界文化社、一九九八より転載。